

道長家の〈花〉としての藤原妍子像

―『源氏物語』と『栄花物語』の間に―

中西 智子

要 旨

道長家で作られた自家の「史実」を語るテキストである『栄花物語』の中で、妍子の造型は家の繁栄や物質的・人的交流の豊かさを体現する存在として、姉の彰子とはまた違った象徴性を有している。そのことは、妍子や娘の禎子の周辺に、女房たちの高い出自や豪華な衣装、新たに制作された当世風の調度、道長家の幸いを喜ぶ人々の楽天的なさまが描かれること、さらに現世的な栄華と結びつく「栄花」「はなばな」などの、〈花〉にまつわる語の使用が顕著に見られることから推察される。

このように妍子方の描写を通じて道長家の繁栄が肯定的に印象づけられることは、〈源氏〉の血の卓越性を中心に据え、藤原氏を劣位のものとして描く『源氏物語』に対し、道長家のコミュニティが抱いたいくばくかの違和感の反映と考えられる。藤原氏の長者でありながら、〈源氏〉の側に立った物語を、実際に源氏を母に持つ娘のために作らせることの意義は、道長家内部の人々のアイデンティティの意識の複雑に錯綜したありようとかかわりが深いものと思われる。『源氏物語』をふまえて『栄花物語』正篇が作られ、読まれた空間は、藤原氏の誇りと〈源氏〉への憧れとが絡み合う混沌とした場であったと言える。

一 はじめに—『源氏物語』から『栄花物語』へ—

『源氏物語』と『栄花物語』正篇は、いずれも藤原道長家の子女および女房達を中心としたコミュニティにおいて作られ、読まれた作品であった⁽¹⁾。両作品は生成・享受圏の範囲がほぼ重なっているのであるが、『栄花物語』において『源氏物語』を強く連想させるような表現は、読み手に対し、歴史の中に「源語の観点で入っていく」⁽²⁾ことを促し、「共有できる信頼の基盤」によって「一つの納得の世界」を示す⁽³⁾などの効果を持っていたとされる。その意味で、『栄花物語』に描かれた「史実」のすがたは、道長家の人々の『源氏物語』に対する理解を反映し、それを利用しながら再構成された一種のコラージュのようなものとも言える。

稿者は先に『栄花物語』正篇の彰子像について、藤壺や紫上などに特徴的な表現を利用しながら、一条天皇の「良き妻」や、後一条天皇・後朱雀天皇の「良き母」といった方向に「〈美化〉」されたものであった可能性を考察した⁽⁴⁾。これまでに頼通摂関時代においては、女院彰子の権力の増大とともに、一条朝の理想化がなされていたことが指摘されている⁽⁵⁾。『栄花物語』に見られる一条天皇と彰子の強い絆という「史実」は、道長家のコミュニティの人々によく知る『源氏物語』の内容や表現によって、ある時は桐壺帝と藤壺のイメージ、またある時は光源氏と紫上のイメージといったように、適宜継ぎ接ぎされつつ、都合よく形象されたものと考えられるのである。

一方、特に『源氏物語』とのかわりということでは、彰子サロンのみならず次女の妍子サロンでもまた『源氏物語』がよく読まれていたことが知られる⁽⁶⁾。しかし、妍子方での物語の生成・享受の問題についてはいまだ不明な点も多く、さまざまな角度からの考察が待たれるところである⁽⁷⁾。

そこで本稿では、『栄花物語』正篇に描かれた妍子像に焦点を当てて、この作品が『源氏物語』を利用しながら、道長家に関する「史実」をどのように構築しようとしているのか、という点について改めて考えてみたい。特に現世的な栄華を示す「栄花」や「はなばな」といった〈花〉にまつわる語の用例に着目しつつ、妍子周辺の特徴的な描写について探る。さらに道長家における『源氏物語』の享受の方向性が、姉妹のサロンの好尚に依拠してある程度の差異を有していた可能性について述べ、藤原氏と〈源氏〉の物語との関係性という大きな問題を考察してゆくための今後の手がかりとしたい。

なお稿者は平安中期の散文作品の制作については「集団制作」の面を重視する立場を取る。したがって『源氏物語』および『栄花物語』正篇の作り手についても、紫式部や赤染衛門といった特定の女房の個人的な活動にとどめることなく、パトロンの意向を受けて執筆・編集・流布までを手分けして担う「藤原道長・頼通家の人々」の営為として総体的に把握していることを付言しておく⁽⁵⁾。

二 『栄花物語』の妍子像（１）—妍子および女房たち—

はじめに『平安時代史事典』によって妍子の略歴を確認しておく（一部西暦を補った箇所がある）。

藤原妍子
ふでわらののよこ

藤原妍子（九九四―一〇二七）摂政道長の二女。母は従一位源倫子。同母兄弟に頼通・教通・彰子・威子・嬉子がいる。「后がね」として育てられ、寛弘元年（一〇〇四）十一月尚侍となる。時に正四位下。翌月従三位、同七年正月には従二位に叙され、二月東宮居貞親王（のちの三条天皇）のもとに入る。……同八年尚侍藤原娥

子とともに女御となる。……長和元年（一〇一二）二月、妍子は娥子に先立ち中宮となる。……翌二年禎子内親王を出産するが、皇子でなかったことから道長は露骨な不快感を示した（『小右記』七月十二日条）。……万寿四年（一〇二七）九月十四日、病のため落飾。即日崩御。……〔関口力〕。

姉の彰子とは異なり、道長の期待に反して結局は国母とならないままに生涯を終えた妍子であるが、一方で妍子周辺の女房の数は、東宮居貞親王（のちの三条天皇）への参入の折や禎子内親王の出産の折などの節目ごとに増大したことが知られている。その顔ぶれは太政大臣藤原為光女や関白藤原道隆女、大藏卿藤原正光女などの高い出自を持つ姫君たちであり、彼女たちはたとえ父親がまだ健在であつても道長家への出仕を強く望まれ、それに応じて続々と出仕したのであつた。そうしたイレギュラーな事態の背景には、「摂関家の家格を高めるとともに、后妃候補を根絶やしにするという極めて無辣で政略的な方法」があつたとする久下裕利氏の見解が妥当と思われる¹⁰。道長の強引な後宮政策により集められた妍子方の上臈女房たちには、特段の職掌があつたわけではなく、また必ずしも経済的に困窮していたわけでもなく、主として妍子サロンの彩りとして存在していた。彼女たちの異様に高い出自や余裕のある経済状態、また実務にかかわらない勤務形態が、妍子サロンの性格をどのように方向づけたかという問題について、以下しばらく『栄花物語』の叙述を確認してみたい。

『栄花物語』正篇のうち、妍子およびその女房たちが集団として登場する主な巻は、およそ以下のように整理される。括弧内はその巻における主な活躍の場面である。

巻八はつはな（東宮参入）・巻九いはかげ（三条天皇参入）・巻十ひかげのかづら（立后）・巻十一つばみ花（禎子誕生）・

卷十二たまのむらぎく（火事）・卷十三ゆふしで（三条天皇崩御）・卷十六もとのしづく（法華經書写）・卷十七おむがく（法成寺金堂供養）・卷十九御もぎ（禊子裳着）・卷二十四わかばえ（大饗）・卷二十八わかみづ（禊子東宮参入）・卷二十九たまのかざり（死）

右の一覧には妍子の東宮参入に始まり、立后・禊子誕生・三条天皇崩御・禊子裳着・禊子東宮参入・死と、天皇の后としての生涯の重要事項が網羅されている。その内、特に次のような箇所では、妍子や禊子方の女房たちの装束や制作物の華美なことが詳細に描かれ、それらが時として東宮や道長・頼通をも仰天させるほどの豪華さであったと述べられる。

①東宮参入後、妍子女房たちの装束

そこらの女房えもいはぬなり装束にて、えならぬ織物の唐衣を着、おどろおどろしき大海の摺裳どもを引き掛けわたして、扇どもを挿し隠し、うち群れうち群れあては、何ごとにかあらん、うち言ひつつさざめき笑ふも、恥づかしきまで思ほされて、この御方に渡らせたまふをりは、心懸せさせたまひけり。

（『栄花物語』卷八はつはな・四四六頁）

②妍子女房たちの法華經書写・經典供養の豪華さ

（妍子）「さべき人々三十人ばかり結縁すべし。まづ法華經の序品は五の御方（為光女）」と定めさせたまひて、「方便品は土御門の御匣殿（正光女）」などのたまはせつつ、今は一定になりて、おのおのいかがせましと、聞きにくきまで思ひ騒ぐ。（中略）經の御有様えもいはずめでたし。あるは紺青を地にて、黄金の泥して書きたれ

ば、紺泥のやうなり。あるは綾の文に下絵をし、経の上下に絵を書き、また経のうちのことも書き現し、(中略) あなめでた、同じくはかうやうにしてこそ、持経にしたてまつらめと見えたり。

〔『栄花物語』卷十六ものしづく・二三四頁～二三八頁〕

③法成寺金堂供養の日、妍子女房たちの装束

枇杷殿の宮(妍子)の御方には、またこの色々の織物、薄物などを同じ数にて、袴の上に重ねさせたまへり。またこれぞなかりつることと、いみじくめづらかなり。

〔『栄花物語』卷十七おむがく・二六九頁〕

④禎子裳着の日、禎子乳母・女房たちの装束

一品宮(禎子)の御乳母たち、何わざをせんといそぎ騒ぐべし。御乳母などは、まめやかにおとなしくすべけれど、唐衣、裳の腰など、山を立て、水を流し、置口をし、螺鈿、蒔絵をし、筋をやり、玉を入れ、すべてえもいはぬことどもをしたり。若き人々は、ましてもの狂ほしきまで心のままにしたり。

〔『栄花物語』卷十九御裳ぎ・三二九～三三〇頁〕

⑤妍子大饗の日、妍子女房たちの装束

おはしましゐて、この御簾際を誰も御覧じわたせば、この女房のなりどもは、柳、桜、山吹、紅梅、萌黄の五色をとりかはしつゝ、一人に三色づつを着させたまへるなりけり。一人は一色を五つ、三色着たるは十五づつ、あるは六つづつ七つづつ、ただ着たるは十八、二十にてぞありける。この色々を着かはしつゝ並みぬたるなりけり。(中略) 殿ばらあさましう目もあやにて、かたみに御目を見交し、あきれたまへり。

〔『栄花物語』卷二十四わかばえ・四五〇頁〕

⑥妍子臨時客の日、妍子女房たちの装束

東の対の御しつらひあざやかにめでたきに、寝殿を見れば御簾いと青やかなるに、朽木形の青紫に匂へるより、女房の衣の褙、袖口重なり、なほほかよりは匂ひまさりて見ゆるは、おほかたこの宮の女房は、衣の数をいと多う着させたまへばなるべし。

（『栄花物語』巻二十八わかみづ・八六頁）

これらの箇所については、内部の者しか知りえない情報もあることから、原資料として妍子方の日記のようなテキストがあったと想定されている。たとえば加納重文氏は、記事の主体性や描写の具象性などから『栄花物語』正篇の作り手を妍子女房と見て、そこには「当世風な華やかさを好む精神傾向」「今めかしさ華やかさを理想とする美的感覚」といった妍子サロンの特質が反映されているとした^①。また斎藤浩二氏は特に和歌に注目し、それらが「さながら中宮妍子をとりまく一つの文学圏の歌日記でも読んでいるような感じ」を与えると述べ、やはり日記的な原資料の存在を想定した^②。

『栄花物語』正篇の中で、妍子サロンの華やかな印象は、数多くの女房たちの贅沢の積み重ねによって強調されてゆく。「五の御方」（為光女）などの上臈女房がしばしば点描されること、妍子女房たちが競い合って派手な振舞に及ぶこと、それらが時に滑稽味を加えつつ明るい場面として描き出されていることが、最上層の貴族の華やかな日々の出来事として、当時の読者たちの憧れの対象となったであろうことは想像に難くない。特に正篇は、道長家の子女たちに家の歴史を伝えるために編纂されたと言われているが^③、そうした教育的な用途にとどまらず、道長家に仕える数多くの女房たちにとっても娯楽的な読み物としての意義があったのではないかと考えられる。

こうした妍子方の雰囲気は、たとえば『紫式部日記』に見える彰子付の上臈女房たちの奥ゆかしさや内気さとはかなり違った印象であり、どちらかといえば『枕草子』に描かれた定子女房たちの明るく社交的な雰囲気に近いように思われる¹⁴。また、その華美なさまに関しては、「もの狂はし」という評価や道長の叱責など、しばしば批判的な言辞も挿入されるものの、それらはいずれも女房たちの大騒ぎを面白おかしく語るためのテクニクにとどまり、批判自体が目指されているわけではない。そうした一面的な叙述のありかたは、たとえば『源氏物語』若菜上巻の女三宮方の描写に見られるような重層的な構成と比較すれば明らかであろう。そこでは「若やかなる容貌人のひたぶるにうちはなやぎさればめる」（二三三頁）様子に対する夕霧の厳しい視線や、ひそかに居心地の悪さを感じている女房の存在、光源氏のわざとの寛容さなどがさまざまな角度から描き込まれているのである。

彰子方で作られた『源氏物語』が、妹の妍子方でも享受されていたことは疑いない。しかしこの姉妹それぞれのサロンの雰囲気の差異は、『源氏物語』の読みの方向性に何らかの影響を与えていなかっただろうか。特に「色めかしきをば、いとあはあはしとおぼしめいた」（『紫式部日記』一九五頁）¹⁵という、彰子の堅実なものの見方をはぐくむものとして作られた『源氏物語』の価値観や、『史記』や白詩に由来する諷諭の意識などは、妍子方の人々に一体どれほど理解されていたのかという点は気になるところである。また『栄花物語』正篇における妍子の造型は、『源氏物語』とのかかわりの中でどのように位置づけられるだろうか。

こうした問題意識のもと、次節以降、『栄花物語』正篇の妍子像についてさらに確認してゆくこととする。

三 『栄花物語』の妍子像（2）——彰子との差異——

本節では『栄花物語』における妍子方の描写の特徴について、彰子方との差異に着目しつつ確認する。次の箇所は、寛弘五年（一〇〇八）正月の道長家の姫君たちの描写である。はじめに土御門第での妍子をはじめとする人々の様子が語られた後、場面が切り替わり、一条院での彰子の様子が語られる。

寛弘五年になりぬれば、夜のほどに峰の霞も立ち vari、よろづ行く末はるかにのどけき空のけしきなるに、京極殿（土御門第）には、督の殿と聞えさするは、中姫君（妍子）におはします、その御方の女房小姫君（威子）の御方など、いとさまざまに今めかしげなる有様にてさぶらふ。殿の御前（道長）、督の殿（妍子）の御方にお

はしまして見たてまつらせたまへば、十四五ばかりにおはしまして、いみじううつくしげにしつらひ据ゑたまつらせたまへり。色々の御衣どもをぞ奉りてゐさせたまへる、御髪の新梅の織物の御衣の裾にかからせたまへるほど、隙なうやうじかけたるやうにて、御丈には七八寸ばかりは余らせたまへるらんかしと見えさせたまふ。御顔の薫めでたく気高く、愛敬づきておはしますものから、はなばたと匂はせたまへり。うたてゆゆしきまで見たてまつりたまふ。御前には若き人々七八人ばかりさぶらひて、心地よげに誇りかなる気色どもなり。（中略）

宮（彰子）は上の御局（一条院）におはします。御手習などせさせたまふは、歌などにやとぞ。ただ今の御年二十ばかりにこそおはしませど、いと若うぞおはします、もとよりいとささやかにおはしますけなめり。さらになほいと心もとなきまでささやがせたまへり。御髪同じやうなることなれど、えもいはずこまやかにめでたくて、御丈に二尺ばかり余らせたまへり。御色白くうるはしう、酸漿などを吹きふくらめて据ゑたらんやうにぞ見えさせたまふ。なべてならぬ紅の御衣どもの上に、白き浮文の御衣をぞ奉りたる、御手習に添ひ臥させたまへり。御髪のコぼれかからせたまへるほどぞ、あさましうめでたう見たてまつらせたまふ。

『栄花物語』卷八はつはな・三八一―三八五頁

道長の土御門第には、妍子以下三名の姉妹たちとその母倫子、さらに周辺の女房たちといった大勢の女性たちが居並んでいる。特に妍子の周辺には、女房の描写に「今めかし」「誇りか」といった表現が用いられ、当世風で自信に満ちた雰囲気が確認される。さらに妍子本人についても「はなばな」という語が用いられ、華やかで堂々とした態度であることが述べられる。一方、一条院の彰子には「ささやか」という表現が繰り返され、小柄で上品な印象が与えられている。彰子の身につけた「紅の御衣」は贅沢な品ではあるが、新年のめでたさの中にも落ち着いた雰囲気で描かれているように思われる。

このように、一連の場面の中で二人の人物を比較することにより、それぞれの個性を印象的に示すという手法は、『栄花物語』の得意とするところであり^{〔5〕}、彰子方と妍子方の対比的な描写は続篇にも見出すことができる。

女院（彰子）は、……。いみじく気高く、さぶらふ人声高からず、うちとけず、しめやかに、心にくくめでたき院のやうなり。かたちを好ませたまひて、今もよき若き人ども参り集まりて、めでたくあらまほしき御有様なり。若き人、挑み交し、扇をさし隠しつつ、並みさぶらふ。装束よりはじめて、われも劣らじと思ひ挑み交したり。されど衣の音かしがましからず、のどやかに心にくき院のやうなり。**皇太后宮（妍子）**の、さま変り、はなばなともて出で、好ましかりしも、さる方にてをかしかりしを、殿ばらも思ひ出できこえたまふ。

『栄花物語』卷三十一 殿上の花見・一八八頁

ここでは、彰子方の女房たちが気品にあふれ、物静かで奥ゆかしい雰囲気であったことがまず語られる。女房たちは若く美貌の人ばかりで、衣装なども良い物を着ていたが、衣ずれの音を高く立てたりせず、落ち着いた様子であったという。一方の妍子は既に亡くなっているが、その女房たちの雰囲気が、この彰子方とは打って変わって「はなばな」と人目に立ち、好感が持てる様子であったと男性たちに回想されている。

こうした妍子方の「はなばな」とした特質は、娘の禎子方にも受け継がれたとされる。そこには「今めかし」の語も見え、禎子サロンの母ゆずりの華やかで当世風な雰囲気が示されている。

皇后宮（禎子）

の御方も、昔の皇太后宮（妍子）の名残はなばなと今めかしうをかしくぞおはします。このご

ろ、内裏わたり昔おぼえてをかし。

（『栄花物語』巻三十四暮まつほし・三一六頁）

続篇は正篇と作られたタイミングや編者が異なるとされるが、正篇を参照して制作されたことは明らかである¹⁶⁾。そこで「はなばな」や「今めかし」などの語が妍子や禎子周辺の雰囲気を示すキーワードとして用いられているのは、おそらく正篇のはつはな巻の叙述をふまえた結果と見てよいだろう。特に「栄花」「はつはな」「つぼみ花」といったように、書名や巻名において〈花〉の比喩と藤原氏の現世的栄華を結びつける傾向を持つ『栄花物語』独自の表現意識を考える上で、「はなばな」という語の使用については検討の必要があるように思われる。この問題は本稿の第五節でふたたび取り上げることとする。

一方で公卿日記にも目を向けると、藤原実資の『小右記』には、妍子の振舞に対する批判的な記述がある。一つ目

は、参会者に負担をかける宴会の開催に関する批判である。

取案内女房 云、宮（彰子）被仰云、日来中宮（妍子）頻有饗饌、卿相有煩歟、無月無花、触事有思之处也、諸卿必有所思乎、亦似二舞、相府（道長）坐間、諸卿饗応、退有誹謗歟、況万歳後哉、連日饗宴、人力多屈歟、今以思之、太無益事也、有停止、尤可徒（然歟）者、仍左府不被参入、参会諸卿興委、直以退出者、可申賢后、有感々々、

『小右記』長和二年（一〇一三）二月二十五日条

右の記事には、妍子が宴会をあまりにも頻繁に開くことを憂えた彰子の発言が引用されている。彰子の非難は父の道長にも及び、道長・妍子の父子が参会する公卿達の負担に対し無神経であることを述べている。息子からこれを伝え聞いた実資はいたく感激し、彰子を「賢后」と讃える。

このとき彰子の発言を取り次いだという「女房」は紫式部であった可能性が高い。実際のところ、彰子の発言はこの「女房」の口を通じたものである以上、どこまでが正確な形であるのかは不明であり、さらには日記の記主である実資自身の脚色がないとも限らない。ただしこの記事の中で、道長・妍子方に対し、彰子―女房（紫式部か）―実資の三者の結託という構図が示されている点は興味深い。少なくとも実資は彰子方と道長・妍子方との間に異質なものを感じ取り、前者をより好ましいものと評価していたのである¹⁷⁾。

二つ目は、疫病蔓延のさなかに宴会を開くことをやめない妍子・頼通らに対する批判である。

昨日関白（頼通）

及彼是上達部参会皇太后宮（妍子）

有管絃、夜已及闌者、近同疫癘方発、死亡無筭、路頭活

（汚カ）穢不可敢云、而一門人達不怖時疫、且尋花遊宴時同無陳、愚也

（『小右記』治安元年（一〇二一）二月二十一日条）

ここで実資は頼通・妍子の「二門」に対して「愚也」との評価をくだしており、路上に死者も溢れる中、それらを他人事として遊びほうけている彼らに厳しい視線を送っている。このように道長・妍子、さらに頼通らの開催する宴会は、世間の窮状を顧みない傍若無人な振舞として、『小右記』の中ではしばしば非難の対象となる。

伊原昭氏によれば、公卿日記の批判は衣装や調度品の「過差」（奢侈）に関する事柄に対してもなされるが、それらは女性の手になる物語文学の態度とは異なるものであったという⁽¹⁸⁾。前節で見たような妍子方の豪華な衣装の描写などは、「過差」の禁制に対する書き手の無頓着さが表れた顕著な例ということになるだろう。『栄花物語』の叙述の中では、たとえば前節⑤の妍子大饗の華美に際しての実資の皮肉も、「いとさまざまをかし」（巻二十四わかばえ・四五三頁）として相対化され、無力化されてしまうのである。

ただし同じ物語文学であっても、『源氏物語』がこれとは逆に、着飾らない簡素な美しさを良しとする傾向を持つことには注意しておきたい⁽¹⁹⁾。たとえば夕顔巻や宿木巻では、夕顔や中君がいづれもやわらかく着なれた衣装を着用しているのが、豪華に着飾った場合とはまた違った美しさとして評価されている。両者は共に藤原氏の権門とのネガティブなかわりを持っており、夕顔がかつて右大臣家の四君に迫害を受けて陋屋に身を移すこととなった経緯や、中君が勾宮と夕霧家の六君の結婚に心を痛める展開は、薄幸の女君の魅力を演出するものとして重要な意味を持つ。このように、藤原氏の女君の豪華な美と、没落した家の女君の簡素な美とを対比した上で、語り手が後者に寄り添っ

た形で物語を進めてゆくという流れは、桐壺巻の弘徽殿女御と桐壺更衣の対比の時点から夙に認められたものであり、『源氏物語』においては違和感のない構図だと言える。しかし『源氏物語』の成立の母胎となった実際の道長家は、むしろ藤原氏の権門として、現世の栄耀栄華を独占すべく力を尽くしているところであつた。そうした道長家の環境の中で、『源氏物語』に示されたような奥ゆかしさの美徳は、実は一律に共感されにくいものであつた可能性がないだろうか。特に聖代とされた醍醐・村上朝を舞台とし、藤原氏よりも〈源氏〉（以下、〈源氏〉と表記した場合は狭義の「源氏」と「皇族」を含めた概念を指す^②）の側の人々の尊貴性を侵しがたいものとして描く『源氏物語』には、現実の道長家のありかたを鋭く諷刺する内容が含まれている。それをこの家の人々自身がどう受けとめたかという点は、改めて考えてゆかなければならない重要な問題だと思われる。

とはいえ、長篇のすがたを持つ『源氏物語』の価値観には必ずしも一貫性があるわけではなく、巻やブロックごとに多少の揺れ幅が存在することも事実である。たとえば玉鬘十帖には、前述の例とは逆に、物質的な豊かさや当世風な美への肯定的な姿勢が顕著に認められる。次節ではそうした箇所と『栄花物語』との表現の重なりを確認するとともに、妍子像の特徴についてさらに検討する。

四 「今めかし」を良しとする物語—玉鬘十帖との連関—

まずは『栄花物語』はつはな巻より、東宮居貞親王への妍子参入の場面を確認する。

宣耀殿（城子）

に、故村上の帝の、かの昔の宣耀殿女御（芳子）にしたてまつらせたまへりけるには、蒔絵

の御櫛の筥一雙は伝はりて、今の宣耀殿女御（**城子**）の御方にぞさぶらふを、その中をいみじう御覧じ興ぜさせたまひしを、これに御覧じ合するに、**かれ（城子の）**はことのほかにこたひなりけり。さるは村上の先帝のさまさまの御心掟、この世の帝の御心よりも勝れさせたまへりけるも、わが御口、筆に仰せたまひて、造物所のもので御覧じては、直しせさせたまへるを、これ（**妍子の**）はなほいとこよなう御覧ぜらるるに、**時世に**したがふ目移りにやと、御心ながら思しめせど、なほこれはいとめでたければ、**殿（道長）**の御心さまの、あさましきまで何ごとにもいかでかくとぞ思しめしける。その（**城子の**）御具どもの、**屏風**どもは、**ためうぢ、常則**などが書きて、**道風**こそは色紙形は書きたれ、いみじうめでたしかし。その上の物なれど、ただ今のうに塵ばまず、あざやかに用ゐさせたまへりしに、これ（**妍子の**）は**弘高**が書きたる**屏風**どもに、**侍従中納言（行成）**の書きたまへるにこそはあめれ。いづこかはこれに劣り優りのあるべきなど、御心の中に思しめしあまりては、**殿（道長）**や**左衛門督（頼通）**などの参りたまへるとのたまひ定めさせたまへるにつけても、御年などもねびさせたまひにたれば、何ごととも見知り、ものの栄えおはしますにこそ、いと恥づかしう、いとど何ごとにつけても、その御用意心ことなり。

『栄花物語』巻八はつはな・四四四・四四六頁）

城子は藤原済時女で、東宮には先に入内し、既に数人の子を儲けていた。その城子方には村上天皇が芳子のためにしつらえた調度が伝わっていた。昔の村上天皇の「御心掟」は唯一無二のものであった上、屏風なども今作ったばかりであるかのようにきれいに受け継がれてきた。しかしこのたび妍子が持参した調度品はいずれも新作かつ素晴らし出来栄えて、道長・頼通の趣味の深さがうかがえるため、東宮はいずれも遜色なしと判断したという。古き良きも

の伝統と、新たに文化を作り出してゆく力とが、ともにかけがえのないものとして評価される箇所である^②。

城子方で保管されている屏風の制作にかかわった「常則」「道風」は、いずれも村上天皇の時代に活躍した実在の人物である。彼らの名はそのまま『源氏物語』絵合巻にも認めることができる。

物語絵はこまやかになつかしさまざるめるを、梅壺の御方は、いにしへの物語、名高くゆゑあるかぎり、弘

徽殿は、そのころ世にめづらしくをかしきかぎりを選び描かせたまへれば、うち見る目の今めかしき華やかさは、いとこよなくまされり。

(『源氏物語』絵合巻・三七九頁)

絵は常則、手は道風なれば、今めかしうをかしげに、目も輝くまで見ゆ。

(『源氏物語』絵合巻・三八一頁)

「常則」「道風」は、藤壺の御前での絵合の催しにおいて、藤原氏である弘徽殿方の提出した『うつほ物語』の絵と本文をそれぞれ担当していた。ただしこの『うつほ物語』が、弘徽殿方によって近時新たに作成された「今めかし」き作品という位置づけである点には注意が必要である。すなわち、はつはな巻における妍子の所持品の特徴は、新作であるという点で絵合巻における弘徽殿女御のそれと対応するということになる。

『源氏物語』の時代設定が醍醐・村上天皇の頃であるために、妍子参入の折とは一世代のずれが生じているのであるが、後宮の女君の所持品をめぐり新旧の対比がなされていること、またそれぞれに良さがあり優劣は決めがたいと

されていることなど、両場面の共通点は多い。しかし、『栄花物語』はつはな巻の東宮の裁定ではどちらの方がより良いとも決定されず、バランスをとった結論になっているのに対し、『源氏物語』絵合巻では藤壺の裁定により、最終的には光源氏の後援する梅壺方の「いにしへの物語」の勝利となる。この点は両場面の差異として重要であるように思われる。

ただし『源氏物語』において、このように「いにしへ」を「今めかし」の上位に置く価値観の絶対性は、玉鬘という新たな女君の登場により更新されてゆくことが河添房江氏により指摘されている²²⁾。

「だが、六条院空間の構出にあたり、光源氏世界の基調にも新風を吹きこむ必要があり、そこに「今めかし」という新たな美意識の加乗が要請されたのではなかったか。玉鬘は、まさにその新感覚あふれる六条院世界のキー・ノートにふさわしい女君であり、内大臣家へと繫留する媒介者であった。というより、これまでの六条院の女君達では担いきれない物語を背負うべく登場させられたのが、玉鬘であったというべきであろうか」

右の文中、藤原氏である内大臣家の血を引く玉鬘によってもたらされたのが、従来の美意識の「転倒」ではなく、あくまでも「加乗」であるという指摘に注意しておきたい。「いにしへ」よりも「今めかし」の方が良い、となったのではなく、「いにしへ」も良いが「今めかし」もまた良いという両立の感覚こそが、玉鬘十帖に認められる新たな価値観なのである。それまでの物語世界では藤原氏の特徴として位置づけられていた当世風で華やかな美や物質的な豊かさが、玉鬘十帖を経た後は、光源氏の六条院の側にも自家のものとして獲得されることとなる。

玉鬘十帖では、長く忘れられていた玉鬘という人物が、巻を隔てて、改めて内大臣家の血脈の者として明確な立

ち位置を得て登場する。玉鬘の幼少期の呼称を「藤原の瑠璃君」とする新たな設定は、このヒロインが宮家や源氏ではなくあくまでも藤原氏の出身であることを強調している。「藤原」の語は作中二例のみで、いずれも玉鬘十帖に出る²³。こうした語の使用の面からも、玉鬘十帖というブロックにおける藤原氏に対する意識の強さがうかがえるのではない。『源氏物語』における「今めかし」く豊かなものを良しとする価値観は、やはり藤原氏とのかかわりの中で醸成され、存在感を増していると見るべきだろう。

ここで作品の外に目を向けてみれば、『源氏物語』の長篇化を可能にした道長家の経済力とマンパワーは、まさしく新たに上質な文化を創造する力そのものであったと言える。妍子周辺の華美を肯定的に捉える価値観は、玉鬘十帖以降の『源氏物語』のありかたと近似する。この問題は、『源氏物語』の成立論におけるいわゆる「紫上系」「玉鬘系」の二系列の生成・享受の問題へと直接的に展開してゆく重要な要素を含むが、本稿では詳しく検討する余裕がない。

先に引用した河添氏の指摘に戻って考えてみると、玉鬘の『源氏物語』における役割と、妍子の『栄花物語』における役割とを関連づけてみることは有効であるように思われる。妍子の造型は、道長家の繁栄を描く『栄花物語』の中で、一条天皇の「良き妻」として、また後一条・後朱雀両天皇の「良き母」としての理想性のイメージに支えられた彰子の造型が担い切れない要素を引き受けているのではないだろうか。すなわち天皇家との血脈的な結びつき一方で、宮廷社会における権力や経済力などの世俗的な部分での優越性をも記しとどめたいという道長家の「史実」に対する欲望が、妍子および周辺女房の華やかなありさまの描写に結実しているのではないかと考えられるのである。

五 藤原氏の「栄花」の表現—「栄花」「はなばな」—

ここまで、妍子方の華やかさが肯定的に描かれることの持つ物語的意義を確認してきた。さらに本節では改めて、『栄花物語』における藤原氏の現世的栄華の描かれ方に関して、「栄花」「はなばな」といった〈花〉にまつわる語の使用の面から検討する。

（1）「栄花」

はじめに「栄花」について確認する²⁴。物語における「栄花」の初例は『伊勢物語』に見える。周知の通り、『伊勢物語』は『源氏物語』の先蹤として、表現や構想の根幹に大きな影響を与えた作品とされている。その百一段の末尾は以下のように閉じられる。

……もとより歌のことはしらざりければ、すまひけれど、しひてよませればかくなむ、

咲く花の下に隠るる人を多みありしにまさる藤の蔭かも

「などかくしもよむ」といひければ、「おほきおとどの栄花のさかりにみまそがりて、藤氏の、ことに栄ゆるを思ひてよめる」となむいひける。みな人、そしらずなりにけり。

（『伊勢物語』百一段・二〇二頁）

「藤原氏の栄花」を称えるようでありながら、藤原良房の全盛に対する皮肉を盛り込むこの章段の諷刺性は明らか

である。さらに『源氏物語』花宴卷（後掲）ではこの章段を元に、右大臣家主催の藤花の宴に招かれた光源氏の振舞によって、藤原氏の長者の権威が相対化されている。そこでは「栄花」という語は用いられていないが、咲き誇る藤花の前に「はなばな」と得意げな右大臣方の様子が描かれている。

「栄花」という語自体は、『伊勢物語』に続いては、『源氏物語』少女卷・手習卷に二例見える。それぞれ夕霧の大学入学や浮舟の出家などに際して、「世界の栄花」「世間の栄花」といった俗世間の価値観を否定的に捉える文脈の中で用いられている。

事果ててまかづる博士、才人も召して、またまた文作らせたまふ。（中略）かかる高き家に生まれたまひて、

* 世界の栄花にのみ戯れたまふべき御身もちて、窓の螢を睦び、枝の雪を馴らしたまふ志のすぐれたるよしを、
……。

* 世界―世間（別）陽國）

（『源氏物語』少女卷・二六頁）

（僧都）「なにがしはべらん限りは仕うまつりなん。何か思しわづらふべき。常の世に生ひ出でて、世間の栄花に願ひまつはるる限りなん、ところせく棄てがたく、我も人も思すべかめる。……」

（『源氏物語』手習卷・三四八頁）

ところが、「栄花」に対するこうした辛辣なニュアンスは、『栄花物語』に至ると見当たらなくなる。『栄花物語』正篇には「栄花」という語の用例が三例見えるが、いずれも道長家の繁栄を単に称えるために用いられている点が注

目される²⁵⁾。

㉖……されど東宮（敦成）

の生れたまへりしを、

殿の御前（道長）

の御初孫にて、栄花の初花と聞えたるに、

この（禎子の）御事をば、つばみ花とぞ聞えさすべかめる。それはただ今こそ心もとなけれど、時至りて開けさせたまはんほどめでたし。

（『栄花物語』卷十一つばみ花・二四頁）

㉗よろづあさましくめでたき殿の有様なり。この土御門殿に幾そたび行幸あり、あまたの後出で入らせたまひぬらんと、世のあえ物に聞えつべき殿なり。これを勝地といふなりけり、これを栄花とはいふにこそあめれと、

*あやしの者どもの下をかぎれる品どもも、喜び笑み栄えたり。げにこそよきことを見聞くは、わが身のことならねどうれしうめでたう、あしきことを見聞くは、詮方なくいとほしきわざなれば、この殿ばら、宮々の御有様を、いづれの民も愛で喜びきこえたり。

*あやしの者どもの下をかぎれる品―なにのあやめもしるましき―は（富甲）

（『栄花物語』卷十一つばみ花・三三頁）

㉘ただこの殿の御前（道長）の*御栄花のみこそ、開けそめにし後、千年の春霞、秋の霧にも立ち隠されず、……。

*御栄―御心は（富甲）

（『栄花物語』卷十五うたがひ・二〇一頁）

右のうち、㉑には、「初花」「つばみ花」といった、正篇の巻名の由来に直接つながると思しき文言があり、この発想が『栄花物語』の成立にとって重要な意味を持っていたことがうかがわれる。また同じく㉒で、三条天皇が土御門第を訪れる箇所では、道長家の幸いを下々の者までが大喜びしていると述べられる⁽²⁶⁾。㉓にも特段の批判的意識は見出されない。これらの場面では、「栄花」の語は道長家の繁栄を端的に示すものとして使用されていると見てよい。言い換えれば、『栄花物語』では「栄花」の語を用いる際に、先行テキストでこの語が内包してきた屈折的な文脈を捨象していることになる。そうしたことばの用い方からは、『伊勢物語』や『源氏物語』の藤原氏に対する皮肉な態度に共感しない、もしくは抗う読者層の存在がうかがわれるのではないだろうか。

なお『紫式部日記』に描かれた一条天皇の土御門第行幸の様子は、はつはな巻の資料として活用されている。日記の中で紫式部は、道長家の盛大な祝儀に関する記事の続きとして「駕輿丁」の苦勞に思いを馳せている。しかしこの「駕輿丁」と女房としての我が身の苦勞とを同じと見る不穩な叙述は、『栄花物語』の話題としては適當でないと判断されたと思しく、『栄花物語』に収載される際にはカットされてしまう。さらに『紫式部日記』では、同じ藤原氏であっても道長一門以外の者はまったく疎外されていることが述べられる。

あたらしき宮の御よろこびに、氏の上達部ひきつれて拝したてまつりたまふ。藤原ながら門分かれたるは、列にも立ちたまはざりけり。

(『紫式部日記』一五九頁)

『紫式部日記』で「藤原」とはつきり書かれるのはここだけである。傍線部の一文は、「駕輿丁」に対する紫式部の個人的な同情からの展開として、権勢をほしいままにする一部の藤原氏と、それを支えながらも日陰の存在となる

弱者との対比を強調する効果を持つ。ここには「藤氏の、ことに栄ゆるを思ひてよめる」という『伊勢物語』百一段の昔男の発言との共通性も見出せるように思われる。

この一文は、『栄花物語』にも「藤氏ながら門分かれたるは列にも立ちたまはず」（巻八はつはな・四一六頁）としてほぼ同じ形で載り、新全集は「藤原氏のなかでも栄えるのはごく一部だけという『日記』の皮肉な見方をそのまま踏襲したもの」と注する。しかし稿者は、この解釈に違和感を覚える。というのも、これに先立つ道長の酔い泣きの箇所で、『紫式部日記』では道長ひとりが泣いているのに対し、『栄花物語』では「殿ばら同じ心に御目拭ひたまふ」との一文が挿入されている点に注目されるためである。すなわち『紫式部日記』とは異なり、『栄花物語』では、我が身の幸運に感激する道長と一心同体の公卿たちの様子がより強調されていると見ることができないのではないか。このようなずらされた引用の跡をたどってみると、当該場面の『栄花物語』の叙述の意図は、あくまでも道長に対する賛美に集約されていくものとして解すべきではないかと思われる。

なお『栄花物語』の後、「栄花」の語は『大鏡』に六例見える。それらは概ね道長や忠平といった、藤原氏の筆頭の人物にまつわる表現となっている²⁷。すなわち平安中期の物語における「栄花」という語のイメージは、時代が下るにつれて、藤原氏の栄耀栄華をストレートに讃美する表現へと変化してゆく。その重要な転換点が『栄花物語』正篇であったと言えるだろう。

（２）「はなばな」

続いて「はなばな」について確認する²⁸。物語では『落窪物語』が早く、落窪姫君の義姉たちの住まいの堂々たるさまに「西の対、東の対に、はなばなとして住ませたてまつりたまふに」（巻之一・二七頁）、また蔵人少将の性質に

関する描写に「はなばな」とものわらひする心にて」(卷之二・一六〇頁)とある。

『枕草子』には齊信ほか男性貴族の衣装の美しさについて二例(「小白川といふ所は」段・七九頁、「返る年の二月二十余日」段・一四二頁)、朝日の様子について一例(「関白殿、二月二十一日に、法興院の」段・四〇九頁)見えるが、いずれも外面的な美しさの表現にとどまる。

『源氏物語』には花宴巻と総角巻に二例見える。

新しう造りたまへる殿を、宮たちの御裳着の日、磨きしつらはれたり。はなばなとものしたまふ殿のやうにて、何ごともしめかしうもてなしたまへり。(中略)(源氏)「なやましきに、いといたう強ひられてわびにてはべり。かしこけれど、この御前にこそは、蔭にも隠させたまはめ」とて、妻戸の御簾をひき着たまへば、(中略)そらだきものいとけぶたうくゆりて、衣の音なひいと*はなやか^かにふるまひなして、心にくく奥まりたるけはひは立ちおくれ、今めかしきことを好みたるわたりにて、やむごとなき御方々物見たまふとて、この戸口は占めたまへるなるべし。

*はなやかに―さはやかに【河】宮尾平大家玉兼)

(『源氏物語』花宴巻・三六三―三六五頁)

花宴巻の「はなばな」は、先に見た『伊勢物語』百一段の引用箇所¹⁾に先立つ部分で、右大臣方の描写に用いられている。あわせて「今めかし」の語も見え、華やかで当世風な藤原氏の権門のイメージが反映されている。女方の衣ずれの音の描写には「はなやか」の語も見える(ただし河内本では「さはやか」)。たしなみや奥ゆかしさの面で、藤壺や左大臣方と比べて右大臣方の品格の劣ることが強く印象づけられる箇所である。なお『源氏物語』の「はなやか」

については、特に玉鬘に関して用いられること、また「今めかし」と並んで使用されることが多い旨、藤田昌畔氏の調査がある⁽²⁹⁾。

【昼寝の君（中君）】

風のいと荒きにおどろかされて起き上がりたまへり。山吹、薄色などはなやかなる色あひに、御顔はことさらに染めにほはしたらむやうに、いとをかしくはなばなとして、いささかもの思ふべきさまもしたまへらず。
（『源氏物語』総角巻・三二頁）

総角巻の「はなばな」は、ひとり懊悩する大君と、もの思いなく昼寝する中君とを対比的に描く箇所に出てくる。ここにも中君の衣装に「はなやか」の語が見える。この場合は藤原氏に関する用例ではないが、屈託のない健全さとなじみやすいものとして「はなばな」が用いられていることが分かる。

『栄花物語』の「はなばな」の用例は以下の通りである。全十五例のうち、男性に対する用例は一例、女性は十四例となり、ほぼ全てが女性に関する表現として用いられているのが特徴である。

「はなばな」（全十五例）

【正篇】①原子（巻四みはてぬゆめ）②道隆の世（巻五浦々の別）③彰子のいる宮中（巻六かかやく藤壺＊はれく）（富岡甲本）④妍子（巻八はつはな）⑤斉信女（巻十六もとのしづく）

【続篇】⑥妍子（巻三十一殿上の花見）⑦入内予定の姫君たち（巻三十一殿上の花見）⑧章子（巻三十一殿上の花見）⑨章子（巻三十二調合）⑩姫子（巻三十四暮まつほし）⑪章子（巻三十四暮まつほし）⑫禎子（巻三十四暮まつほし）

⑬寛子（巻三十六根あはせ）⑭寛子女房（巻三十六根あはせ）⑮彰子（巻三十七けぶりの後）

右のうち特に正篇の例を確認すると、⑤斉信女以外は全て、藤原氏の筆頭の家（九条流）の出身者に関連して用いられている。①は道隆の次女の原子、②は道隆の世の回想、③は彰子の入内によって明るい雰囲気になった宮中を表している（ただし富岡甲本では「はれく」。その本文はそれぞれ以下の通りである。

①かくて摂政殿（道隆）をば、帝（一条）おとなびさせたまひぬれば、関白殿と聞えさす。中姫君（原子）、十四五

ばかりにならせたまひぬ。東宮（三条）に参らせたまつりたまふ有様、はなばなとめでたし。（中略）女御の御心ざまもはなやかに今めかしう、*さまあしき御有様なり。

*さまあしき御さまおかしき（富甲）（『栄花物語』巻四みはてぬゆめ・一九八―一九九頁）

②故殿（道隆）などの御世の*はなばなとありしに、かやうの御有様（脩子誕生）ならましかば、いかばかりめでたからまし、それを思し出でさせたまふにも、ゆゆしく思さる。

*はなばな―はれく（富甲）（『栄花物語』巻五浦々の別・二六九頁）

③ただ今、内裏わたり（彰子入内のおかげで）はなばなとめでたくいみじきに、三条大后宮（昌子）はこの一日の日出せさせたまひにしかば、それをかの宮には、あはれに悲しきものに思ふべし。

（『栄花物語』巻六かかやく藤壺・三〇四頁）

⑤五節になりぬれば、そのころの御有様など（斉信女に）はなばなとしたてたまへり。

（『栄花物語』巻十六もとのしづく・二四六頁）

ここで改めて、関連する表現として「はなやか」および「ものはなやか」についても確認すると、以下のような使用状況となる。こちらはおよそ男性十例・女性十三例となり、明らかな男女差は見出されない。正篇の用例としては、「はなやか」「ものはなやか」合わせて十五例のうち、九条流の人々の周辺における用例が八例（①③④⑤1234）となっており、ほぼ半数となる。

「はなやか（十ものはなやか）」（全二十五（十七）例）

〔正篇〕へはなやか①伊尹（巻一月の宴）②昌子女房（巻一月の宴）③原子（巻四みはてぬゆめ）④教通・頼宗（巻十二たまのむらぎく）⑤妍子（巻十四あさみどり）⑥行成（巻十六ものしづく）⑦世間（巻三十つるのはやし）⑧世間（巻三十つるのはやし）へものはなやか①綏子（巻四みはてぬゆめ）②脩子（巻五浦々の別）③道隆（巻八かやく藤壺）④原子（巻七とりべ野）⑤儀礼（巻十ひかげのかづら）⑥儀礼（巻十三ゆふしで）⑦斉信女（巻十六ものしづく）

〔続篇〕へはなやか⑨宮中（巻三十四暮まつほし）⑩行経（巻三十四暮まつほし）⑪通房（巻三十四暮まつほし）⑫資綱・経家（巻三十六根あはせ）⑬麗子女房（巻三十六根あはせ）⑭俊家（巻三十六根あはせ）⑮長家の子たち（巻三十七けぶりの後）⑯宮中（巻三十八松のしづえ）⑰実仁乳母（巻三十八松のしづえ）⑱儀礼（巻三十八松のしづえ）⑲朝日（巻三十九布引の滝）⑳賢子（巻三十九布引の滝）㉑儀礼（巻四十紫野）㉒宮中（巻四十紫野）㉓媼子女房（巻四十紫野）㉔令子（巻四十紫野）㉕忠実（巻四十紫野）へものはなやかナシ

右の一覧から、「はなばな」「はなやか（ものはなやか）」といった、派手で明るい気風の描写が、『栄花物語』正篇では九条流の人々、特に道隆家・道長家の人々に集中して用いられる傾向を持つと言えるようである。中でも原子は、先に東宮に入内していた城子との対比において個性を表現される際にこれらの語を用いられている。原子の死後も、そうした性質が権門の姫君ならではの他を圧するような魅力として、同じく東宮に入った妍子の造型にも再利用されたのではないかと思われる³⁰⁾。

実は平安後期から中世にかけての物語の研究においては、「はなばな」の語が特定の作中人物と結びつくことが夙に指摘されている。樋口育代氏は主として後期物語の用例を網羅的に確認し、「はなばな」が『とりかへばや物語』の男装の女君の描写に集中すること、また『狭衣物語』には統一性がないこと、『夜の寝覚』では寝覚上の周辺に出ることを述べた³¹⁾。また伊達舞氏は、「はなばな」とした特質が『我が身にたどる姫君』では摂関家系の中宮系統の母娘に見られることを確認し、「皇后宮系統に優位な状況を中宮系統優位へと転換させる力として作用」していると指摘した。伊達氏は『我が身にたどる姫君』が九条流の周辺で作られた可能性があることから、鎌倉時代以降の「皇統と摂関家の相対的な力関係の問題」が反映されたと見ており、『栄花物語』における使用状況の偏りについて考える上でも示唆に富む³²⁾。あわせて「あざやか」の語に関して、『源氏物語』においては藤原氏の人々に用いられる特徴的な表現であるとの筒井ゆみ子氏の指摘³³⁾、また『源氏物語』では皇統の人々には決して用いられないのに対し、『栄花物語』では逆に、天皇のあらまほしい性質として用いられているとの馬如慧氏の指摘³⁴⁾などにも注目される。後期物語以降に顕著となることばの感覚の変容の萌芽は、『栄花物語』正篇に認めてよいように思われる。

以上、本節では「栄花」や「はなばな」といった〈花〉にまつわる語が、『栄花物語』正篇では特に藤原氏筆頭の家の人々と結びつく傾向があることを確認した。あわせて藤原氏の繁栄に関しては、『源氏物語』や『紫式部日記』

と『栄花物語』正篇との間に捉え方の差異が看取されることを述べた。これらの作品はいずれも藤原道長・頼通家のコミュニティにおいて作られ、読まれたものである。とはいえそれぞれの作品を支える価値観には差異があり、特に現世的な栄耀栄華に対してしばしば発揮される『源氏物語』の諷諭性は、『栄花物語』正篇ではことばのニュアンスをずらす形で相対化されていると考えられる。

六 おわりに―『源氏物語』と『栄花物語』の間に―

本稿では、『栄花物語』正篇における妍子および妍子サロンの描写と『源氏物語』とのかかりについて考察してきた。藤原道長家で作られた自家の「史実」を語る物語の中で、妍子の造型は家の繁栄や物質的・人的交流の豊かさを体现する存在として、姉の彰子とはまた違った象徴性を有している。そのことは、妍子や娘の禎子の周辺に、女房たちの高い出自や豪華な衣装、新たに制作された当世風の調度、道長家の幸いを喜ぶ人々の楽天的なさまが描かれること、さらに現世的な栄華と結びつく「栄花」「はなばな」などの、〈花〉にまつわる語の使用が顕著に見られることなどから推察される。

このように妍子方の描写を通じて道長家の繁栄が肯定的に印象づけられることは、〈源氏〉の血の卓越性を中心に据え、藤原氏を劣位のものとして描く『源氏物語』に対し、道長家のコミュニティが抱いたいくばくかの違和感の反映と考えられる。現実世界において、妍子サロンを構成する上臈女房たちは入内の夢を一樣に断たれており、サロンの主である妍子もまた、皇子の母となることは叶わずに終わったのであった。テクストの中に、妍子およびその女房たちの、貴族の最上層の家の内部の人間として華やかな生活を送る様子が描かれること、またそうしたものを読んで楽

しむことは、実際の彼女たちが抱いていた空虚さに対する、ある種の慰撫的な機能をも担っていたと考えることもできよう。

さて『栄花物語』続篇に、藤原道長の正妻であり、彰子・妍子・威子・嬉子の四姉妹の母である源倫子のアイデンティティを示す贈答歌が残されている。

三月つごもり方に、いとしなひ長くおもしろき藤を奉らせたまひて、鷹司殿（倫子）より、

藤壺の花はことわり劣らじとみなもとさへも開けたるかな

御返し、宮（威子）、

藤の花神さびにけるみなもとにほひ劣れる末ぞ折りうき

唐の紙に、いと今めかしくをかしく書かせたまへりければ、殿の上いみじくめでたてまつらせたまひけり。

（『栄花物語』卷三十二 詞合・二二六頁）

母の倫子から、三女の威子に自邸（鷹司邸）の「いとしなひ長くおもしろき藤」の花を差し上げるということで歌が贈られた。それは藤壺に入っている威子の全盛を讃えつつ、「みなもと」＝自分の所でも立派に藤が咲きましたよと述べる内容で、藤原氏／源氏の区別の意識が明確に看取される。さらに返歌の方でも「神さびにけるみなもと」と言っており、娘の側にも同様の意識があることが分かる。威子は藤原氏を象徴する〈花〉である自分を「にほひ劣れる末」と称し、母の血筋の尊貴性を称揚する。道長家の最もプライベートな家族関係の中で、女性たちにこうした区別の意識が認められることは興味深い。

これまで、藤原道長自身の対源氏意識に関しては、「摂関藤原氏の家格を、少くとも賜姓源氏の家格まで格上げしようとしてゐた」という阿部秋生氏の指摘³⁵⁾をはじめ、さまざまに考察が重ねられてきた³⁶⁾。当時の公卿にとって内親王の降嫁を至上の榮譽とすれば、源氏の女を妻に迎えるのは妥協の結果ということにはなるが³⁷⁾、当初は兼家の五男にすぎなかった道長にとっては、左大臣源雅信の長女である倫子との縁談が望み得る中で最上のものだっただろう。その後、道長は三后を倫子腹の娘から出して皇室との結びつきを盤石なものとし、後の摂関家の礎を築いた。そこで作られていたのが皇族と源氏の血脈が混然一体となった〈源氏〉を主軸とする女手の読みものであり、それが宮廷社会で評判を呼んだということは、おそらく偶然や紫式部の個人的な好尚の産物ではなく、この倫子腹の娘たちによって実現されるはずの道長家の政治性と大いに絡むものであったと見るべきである³⁸⁾。藤原氏の長者でありながら、〈源氏〉の側に立った物語を、実際に源氏を母に持つ娘のために作らせることの意義は、道長家内部の人々のアイデンティティの意識の複雑に錯綜したありようとかかわりが深いものと思われる。『源氏物語』をふまえて『栄花物語』正篇が作られ、読まれた空間は、藤原氏の誇りと〈源氏〉への憧れとが絡み合う混沌とした場であったと言える。

※『伊勢物語』『落窪物語』『枕草子』『紫式部日記』『源氏物語』『栄花物語』は新全集に拠り（適宜表記を私に改め、括弧内に注を補った）、『源氏物語』『栄花物語』については重要と思われる異同をその都度示した（『源氏物語大成』『河内本源氏物語校異集成』『別本集成』『別本集成続』『栄花物語の研究 校異篇』参照）。『古今六帖』『後撰集』『和泉式部集』は新編国歌大観、『宇多院物名歌合』は平安朝歌合大成（増補新訂）に拠る。『小右記』は大日本古記録に拠る。

〔注〕

- (1) 加藤静子『栄花物語』正篇の方法と女房たち」（『王朝歴史物語の方法と享受』竹林舎、二〇一一年。初出は一九八一〜二〇一一年）など参照。
- (2) 加藤静子『栄花物語』―源氏物語の影―（『国文学解釈と鑑賞』五四―三、一九八九年三月）。
- (3) 中村康夫『栄花物語』と史実」（『栄花物語』の基層）風間書房、二〇二二年。初出は一九九一年）。
- (4) 拙稿「〈美化〉される藤原彰子像―『栄花物語』いはかげ巻における『源氏物語』賢木巻受容から―」（桜井宏徳・中西智子・福家俊幸編『藤原彰子の文化圏と文学世界』武蔵野書院、二〇一八年）。
- (5) 田中宗博「聖帝説話のゆくえ―『富家語拔書』『古事談』『続古事談』の一条天皇説話について―」（『大阪府立大学紀要人文・社会科学』四四、一九九六年）、高松百香「一条聖帝観の創出と上東門院」（『歴史評論』七〇二、二〇〇八年一〇月）など。
- (6) 『紫式部日記』御冊子作りの段に、道長が物語の草稿本を妍子方に献上したことが記されているほか、瓦井裕子「藤原妍子周辺女房の哀傷歌と『源氏物語』」（『王朝和歌史の中の源氏物語』和泉書院、二〇二〇年。初出は二〇一七年）は、妍子の死後に女房たちが詠み交した哀傷歌が、紫上と光源氏の死別の場面をふまえていることを指摘する。
- (7) 諸井彩子『『栄花物語』と女房ネットワーク―妍子・禎子内親王サロンの営みと弁乳母姉妹を中心に―』（『撰関期女房と文学』青間舎、二〇一八年。初出は二〇一四年）は、『栄花物語』正篇・続篇の成立の背景となった女房たちの文化的営みについて具体的に考察する。
- (8) 拙著『源氏物語 引用とゆらぎ』（新典社、二〇一九年）に詳しく述べた。

- (9) 角田文衛監修・「財」古代学協会・古代学研究所編『平安時代史事典』（角川書店、一九九四年）。
- (10) 久下裕利『栄花物語』の記憶―三条天皇の時代を中心として―（『源氏物語の記憶―時代との交差―』武蔵野書院、二〇一七年。初出は二〇〇七年）。
- (11) 加納重文「作者の周辺―妍子」（『歴史物語の思想』京都女子大学、一九九二年。初出は一九六九年）。
- (12) 斎藤浩二「栄花物語に描かれた中宮妍子・一品宮禎子とその周辺」（『栄花物語論稿』武蔵野書院、一九九五年。初出は一九七一年）。
- (13) 星山健「『栄花物語』正編研究序説―想定読者という視座―」（『王朝物語の表現機構 解釈の自動化への抵抗』文学通信、二〇二一年。初出は二〇一五年）、桜井宏徳「『栄花物語』と頼通文化世界―続編を中心として―」（和田律子・久下裕利編『平安後期頼通文化世界を考える―成熟の行方』武蔵野書院、二〇一六年）。
- (14) 増田繁夫「『栄花物語』の描く中宮定子と彰子の後宮―「気近さ」と「奥深さ」―」（山中裕・久下裕利編『栄花物語の新研究』新典社、二〇〇七年）は、『栄花物語』作者の姿勢に、定子後宮を中心とした「よき時代」への愛惜の念があると見る。
- (15) 木村由美子「比較叙述が示す『栄花物語』の人間関係」（山中裕編『栄花物語研究 第三集』高科書店、一九九一）。
- (16) 『栄花物語』の書名や成立に関する見解は新全集の解説に詳しい。
- (17) 服藤早苗「次女妍子 姉とたたかって」（服藤早苗・高松百香編『藤原道長を創った女たち』明石書店、二〇二〇年）、同「実資とキサキ―養母能子・妻婉子女王・賢后彰子たち―」（倉本一宏・加藤友康・小倉慈司編『『小右記』と王朝時代』吉川弘文館、二〇二三年）参照。

(18) 伊原昭「平安の人びとの生活と色」(『王朝の色と美』笠間書院、一九九九年)。

(19) 前掲注(18) 伊原書においても、『源氏物語』が禁制の枠の中で王朝の美を熟成させていったこと、贅沢を否定した場合にこそ凡庸な美を超えた美があるとするものが指摘されている。

(20) 高橋麻織『『栄花物語』『大鏡』における〈源氏〉の位相 『源氏物語』と創造された「歴史」』(高橋亨編『紫式部』と王朝文芸の表現史』森話社、二〇一二年)。

(21) 河添房江『『栄花物語』と唐物』(加藤静子・桜井宏徳編『王朝歴史物語史の構想と展望』新典社、二〇一五年)は、唐物の「ブランド性」と妍子の容姿・氣質の相性の良さや、禊子の裳着が唐物づくしであったこと、それが道長の美意識の反映であるとともに、『源氏物語』の女三宮の裳着との共通性を持つことを指摘しており、示唆に富む。

(22) 河添房江『六条院王権の聖性の維持をめぐる――玉鬘十帖の年中行事と「いまめかし」――』(『源氏物語の喩と王権』有精堂出版、一九九二年。初出は一九八八年)。

(23) (右近)「例の藤原の瑠璃君といふが御ために奉る」(玉鬘巻・一一二頁)、(紫の上)「うつほの藤原の君のむすめこそ、いと重りかにはかばかりき人にて、過ちなかめれど、すくよかに言ひ出でたる」(蜚巻・二一五頁)の二例。

(24) 以下の「栄花」の例に関する記述は、拙稿「藤原道長家と「源氏」の物語」(河添房江・松本大編『源氏物語を読むための25章』武威野書院、二〇二三年)に指摘した箇所を含む。

(25) 続篇には「栄花の上の巻には」(巻三十六根あはせ・三八三頁)とあり、正篇を「栄花」という書名で総称する意識が見られる。

（26）『源氏物語』では玉鬘十帖の内、六条院の春の町を賛美する箇所「何のあやめ知らぬ賤の男も（中略）笑みさかえ聞きけり」（胡蝶巻・一六九頁）とある。『栄花物語』における当該場面の土御門第賛美との共通性、とりわけ富岡甲本の異文との表現的関連が認められる。

（27）その内訳は、道長三例・忠平二例・選子一例である。

（28）和歌の用例は多くないが、「鴈靡花（かにひのはな）」の物名歌として「片をかにひのはなばなに見えつるはこのものにも誰かつける」（一七・紀貫之）とする『宇多院物名歌合』十巻本が時期としては早い（ただし廿巻本では第二句「ひのはなれつつ」、「古今六帖」かにひ・三九一〇では「日のはるばるに」）。また『後撰集』に「をるからにわがなはたちぬ女郎花いざおなじくはなばなに見む」（秋中・二七四・藤原興風）と見える。『和泉式部集』には「はなばなと人にみえななちくもるかすみのうちに風もこそふけ」（八四五）とあるが、「はなはなほ人にみせんへだてたる霞の内に風もこそふけ」（一八八）の異伝歌も見える。いずれも実際の花の美しさに関連する表現である。

（29）藤田葛畔「源氏物語「はなやかなり」について」（『金沢大学語学・文学研究』一九、一九九〇年七月）。また伊原昭「はなやか」攷」（『日本大学国文学会語文』三三、一九七〇年五月）は、「はなやか」の用例が平安の散文の中で『源氏物語』に突出して多く、『源氏物語』以後は外面の見た目だけでなく人物の内面をも表すようになってゆくことを指摘する。

（30）前掲注（21）河添論文にも同様の指摘がある。

（31）樋口育代「『とりかへばや』男装の女君の「はなばなと」について」（『甲南国文』四九、二〇〇二年三月）。

（32）伊達舞「『我が身にたどる姫君』の女四宮―「はなばな」とした特質をめぐって―」（『中世文学』六四、二〇

一九年六月)。

(33) 筒井ゆみ子『源氏物語』に見る「あざやかな」人物—形容動詞アザヤカナリの語義から—(『学習院大学上代文学研究』四三、二〇一八年三月)。

(34) 馬如慧『源氏物語』における「ををし」と「あざやか」—二つの男性群の造型—(『平安朝文学研究』復刊二八、二〇二〇年三月)、同「物語文学における「あざやか」な人物たち—『源氏物語』を中心に—」(『国際日本文学研究集会会議録』四三、二〇二〇年三月)。

(35) 阿部秋生「源氏物語の環境」『源氏物語研究序説 上』(東京大学出版会、一九五九年)。

(36) 山中裕「栄花物語に現れた藤原道長」(『歴史物語成立序説』東京大学出版会、一九六二年)、助川幸逸郎「一条朝の源氏公卿と「源氏幻想」—「源氏」物語を生み出したもの—」(助川幸逸郎・立石和弘・土方洋一・松岡智之編『新時代への源氏学』6 竹林舎、二〇一四年)、福家俊幸『紫式部日記』の中宮彰子(前掲注(4)『藤原彰子の文化圏と文学世界』、倉本一宏『公家源氏—王権を支えた名族』(中公新書、二〇一九年)など参照)。

(37) 河添房江氏のご教示による。

(38) 拙稿「源氏」の物語という〈企て〉—藤原道長と紫式部と「作り手」の人々(横溝博・クレメンツツレベツカ・ノットIIジェフリー編『日本古典文学を世界にひらく』勉強出版、二〇二二年)にて検討した。また本稿校正中に、助川幸逸郎「紫式部は「源氏イリュージョン」といかに向きあったか—「究極」であるがゆえに「禁忌」—」(『歴史評論』八八五、二〇二四年一月)にふれた。貴顕男性に支持される物語の創出という視点に教えられることが多かった。稿者は道長家の女性達のコミュニティにおける物語の役割に注

目しているが、あえて〈源氏〉の側に立つ虚構が必要とされたことの意義については、なお多角的な検討の余地があるだろう。

※本稿は早稲田大学古注の会（二〇二三年六月）での口頭発表をもとにしている。席上等でご教示をくださった方々に心より感謝申し上げます。また本稿はJSPS 科研費 23K00291 による成果の一部である。